

(別紙2)

## 審査の結果の要旨

氏名 伊藤紫織

江戸時代中期に明清画の刺激を受けて起こった絵画は唐画と呼ばれる。来日した沈南蘋の影響を受けて濃彩で緻密な花鳥画を描いた南蘋派や、主として水墨と淡彩で山水画・花卉雑画を描いた南画などが含まれる。本論文は、第一章で、唐画が形成されるに至る江戸絵画の対外関係、また南蘋画風がいかなる人たちに受け入れられたかに関して最も資料が豊富に残る大名関連の事跡を概観するなどした後に、京都、大坂、江戸それぞれの地で唐画の範疇に入る数名の画家を論じる。

中では第三章の「大坂の唐画」と、補論として書かれた『賞春芳帖』と岩垣龍溪主宰松蘿館詩社」とが白眉といえよう。前者は、南蘋風をよくした森蘭斎を中心に、大坂画壇の南蘋画風を扱う。特に蘭斎の「岩瀬庄右衛門・八郎右衛門宛書簡」(東京都立中央図書館渡辺刀水文庫蔵)を紹介し、彼の長崎滞在の時期、師である熊斐の娘を妻としたこと、郷里の越後などに支持者があったことなど、その伝記に関わるいくつかの事柄を裏付けたのは評価できよう。また、『蘭斎画譜』の書誌を調査・整理するとともに、そこに詩文を寄せる人物を混沌社とその他懐徳堂関係者や京坂の文人に探り、画譜刊行の進みぐあいと『兼葭堂日記』の蘭斎訪問の記事との照合や、木村兼葭堂の詩文が画譜に占める位置を考証することで、兼葭堂がこの画譜の出版に深く関与したことを具体的に解明したのも功績である。同じ章で、淵上旭江についても、その伝記、「五畿七道図」の成立、『山水奇観』の出版について実証的に論じ、意義がある。補論も手堅い研究であり、正面摺りの画帖『賞春芳帖』の諸本を調査し、画帖の内容を詳細に報告して詩画を寄せる人々を明らかにするとともに、京都の漢学者岩垣龍溪が主宰した松蘿館詩社の面々が出資して私家版として制作され、後に菱屋孫兵衛が売品として出版したと推測する。

これらの諸論は、江戸時代中期絵画史に新たな知見をもたらしたものであり、文芸の研究にも寄与するところがある。そのほか、曾我蕭白「群仙図」に描かれる仙人の比定に見るべきものがあり、京都における唐画の枠組みとその解体という有効な問題提起もある。全体に、既発表の論考をまとめた結果が首尾一貫した考察に融合しておらず、江戸時代における唐画の概念を明確にするには至っていない。唐画のうち南蘋派の一方にある南画についての言及がほとんどなされていないのは、考察の幅を狭めてしまっている。個々の考察でも造形的な分析や歴史的な理解がじゅうぶんとはいえ、さらに研究を深める余地がおおいにあるだろう。しかし、関連する作品と文献を精査した本論文が、江戸時代絵画史の研究として一定の水準に達していることは認められる。審査委員会は、今後の課題が多いことを確認した上で、博士(文学)の学位を授与するのを適当と判断した。